＜前回＞ユダヤ教とローマ帝国

A．ヘレニズム・ローマ時代のユダヤ教

（1） パレスチナのユダヤ教

1．支配の変遷：

・ハスモン朝からヘロデ家へ

・エジプト→シリア→ローマ：二重統治：独立ではなく傀儡政権

2．ユダヤ人共同体内部の支配階級：

・最高法院（サンヘドリン、議会）：ユダヤ人の自治機関。イエス時代には大祭司を議長とする 71 人の議員で構成されていた。

・神殿（第二神殿）、大祭司・祭司・レビ人

ダビデ・ソロモン時代の祭司ツァドクの子孫と称する一家が大祭司職を世襲。

・民衆の宗教性とそれをリードする律法学者：会堂における口伝律法の解釈と発展に携わった。

3．諸セクト

・サドカイ派：ツァドク家の祭司を中核とする上流祭司と貴族、商人などの富裕階級。前２世紀に結成。

神殿祭儀を最重要視、律法解釈には保守的、権力志向的。「モーセの律法」（成文律法）のみを認める。そこに書かれていない来世信仰を否定。

・ファリサイ派：ヨハネ・ヒルカノス時代のサンヘドリンから分離派として追放されたことによって、「分離主義者」（ファルーシーム）を呼ばれる。「世俗から分離」。

ハスモン時代に出現した敬虔主義者（律法学者に指導された民衆）の後継者。

天使、悪霊の存在、霊魂の不滅、肉体の復活などの来世信仰を肯定。

・エッセネ派：パレスチナ各地の町や村井に散在して生活、厳格な沐浴、厳しい入会規則、徹底した禁欲、財産の共有など。

クムラン教団（1947 年の発見の死海文書の担い手）との関係は微妙。

・熱心党：ユダヤ人の宗教的政治手段、父祖伝来の伝統を遵守し、ローマ帝国による異邦人支配を拒む。メシアの支配のために武力を行使することを肯定。

（2）ユダヤ人の運命：古代から中世へ

4．ユダヤ教はキリスト教の母体であり、キリスト教がヨーロッパへ展開する基盤を提供した。

5．ユダヤ戦争(66-70, 132-135)以後：ローマ帝国に対する反乱は最悪の結果で終わった（殺された一般市民は 60 万人以上に及ぶとも言われる）。

捕虜収容所（ヤブネ）のユダヤ人による共同体再建の努力。

ヨハナン・ベン・ザカイ。聖書と口伝律法という指導原理の確立。ユダヤ教聖書正典の編集（90 年頃までに）

↓

ローマ帝国の強硬な弾圧（ハドリアヌス帝）、パレスチナ・エジプト・キプロスなどの地中海東部地域のユダヤ人は激減。キリスト教に改宗したローマ皇帝の反ユダヤ政策（ローマ市民とユダヤ人の結婚の禁止）。特に分裂後東ローマ帝国。

↓

バビロニア（ササン朝ペルシャ）へ中心が移る。

11 世紀末：ユダヤ人の総人口 100 万台、その 90 %はイスラム圏に居住。

B．ローマ帝国の迫害とキリスト教

（1）ローマ的世界：共和国から帝国へ

BC. 27: アウグストゥス（オクタビアヌス）、初代ローマ皇帝

死後（AD.14）、元老院布告で神格化（divus）、皇帝崇拝へ。
ドミティアヌス帝（81-96）：「主にして神」（dominius et deus）

**（２）ローマ帝国による初期の迫害**

犯罪者として処刑されたイエスとその運動の後継者としての初期キリスト教会。
対決は不可避的であったが、それは何をもたらしたのか。

１．迫害下のキリスト教（１～３世紀）：この間にキリスト教の原型が完成した。
迫害（規模も期間も様々、棄教者の問題）
キリストの十字架刑（30 年頃）→古代地中海世界へキリスト教の伝播、パウロ
66：ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。　第１次ユダヤ戦争（66-70）
95 頃：ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。　第２次ユダヤ戦争（132-135）
249：デキウス帝の迫害
260：ガリエヌス帝の勅令（迫害の時代の中断）、40 年間の平和。
303：ディオクレティアヌス帝、キリスト教を迫害。

２．ユダヤ教から継承したもの：
・迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
・終末・時の切迫の実感　→　迫害下の教会への励まし（最後まで耐え忍ぶ者は幸いである、命の書）

３．黙示文学の影響：千年王国論（終末時のキリストの千年支配、黙示録 20:2-6 ）

４．ローマの平和か、神の平和か（二者択一）
ローマの平和（Pax Romana）：政治と経済による上からの支配、そのもとでの秩序＝平和。
・皇帝崇拝：平和は皇帝の恩恵である。神的な皇帝。
・ローマの軍隊による地中海世界の統合＝古い諸国家の滅亡
交通網と法の整備
・経済：貨幣の統一、商品作物の海洋交易による富の集中。
↓
民族的伝統・文化の解体と環境破壊

**（３）迫害と殉教の時代**

８．アンティオキアのイグナチィオス（35 頃-110 年以降、アンティオキアの司教）：
殉教の神学：殉教はキリストの受難の模倣であり、世の終わりにサタンを投げ打つ手段として代償の役割を果たす。イエスの行為の真実性を証明する。→日本の切支丹殉教へ

９．キリスト教弁証家とキリスト教神学形成
「告発は二つあった。第一は、キリスト教は帝国の構造の基盤を危くすることによってローマにとって脅威であるという政治的告発である。第二は、キリスト教は哲学的断片をまぜ合わせた一つの迷信であるという哲学的告発であった。」（ティリッヒ、65）

10．キリスト教思想の形成：「弁証学者たちの「哲学」は、覚知主義者たちの説いたグノーシスと異なって、キリスト教の基本信条である創造神の信仰、神の子の受肉としてのイエス・キリスト、その十字架、死、復活、再臨、および最後の審判、肉体の復活と救われたる者に与えられる永遠の生命などを否定したのではなく、ただ能うかぎり哲学的にそれらの合理性を弁明しようとしたものであった。」（有賀、137）

11．キリスト教会の発展過程：
特に３世紀後半の迫害中断期にキリスト教は急成長。都市型宗教として。
「二〇〇年の時点でキリスト教が帝国の西方の領域になお行き渡っておらず、ローマ市の信者数の方が帝国全体よりの信者数よりもかなり多かったと考えられる。」（スターク、22）

# ９．古代キリスト教１――ヘレニズム・ローマ世界、グノーシス主義

## （１）古代地中海世界の宗教的状況とグノーシス主義

１．古代の思想運動・宗教運動としてのグノーシス

二世紀から四世紀頃にかけて、正統キリスト教会と競合関係にあった宗教運動（キリスト教内あるいは外、異端あるいは異教）の総称（単一の運動体ではない。多様の神話体系）。エリート主義的傾向の「グノーシス」（認識、知識→高次の真の知恵）を探求する古代に広範に見られる精神動向の一翼を担う。正統キリスト教（パウロ）もこの動向と緊密な関係にある。

２．「1:19「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／賢い者の賢さを意味のないものにする。」20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21　世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。・・・2:6　しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。7 わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。8 この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」（Ｉコリ）

３．年代：

・Ｉコリやコロサイ（「2:8　人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。」）→１世紀に後に正統キリスト教会と対抗する運動体としての「グノーシス」の存在を遡及させることは適切ではない。

「われわれが次に考察しようとする運動の前史」（マルクシース、98）

「「認識」に関する統一的な理解は二世紀のはじめのキリスト者の間では存在しなかったのである」（20）、「二世紀末になると「認識者」を自称する多くのキリスト教の集団を数えることが可能になる」（24）

「Ｉコリントにおけるパウロの論敵の思想は「グノーシス的」傾向を若干有してはいたが、未だ「グノーシス主義」となるには至っていない。」（荒井、1986、179）

・「「ヘブライ人への手紙」を取り上げるにあたって、われわれはある私的な写本工房の中に腰を据えている学者を想像してみるのがよい。彼は巻物やパピルスのノートの山をひっくり返したり、考え事をしながら庭園の中を歩いたり、何時間も立て縦の机の上にかがみ込んだり、ヘブル語聖書のギリシア語訳の細部にこだわってそこを何度も読み返し、他の何人かの高い教育を受けた知的に洗煉されたキリスト教の知識人たちと一緒になっていくつかの観念を試したりしている」（バートン・マック『誰が新約聖書を書いたのか』青土社、283 頁）。80-90 年頃。

４．起源（マルクシースより）

「「グノーシス」の核心として何か非キリスト教的神話、所謂「救済された救済者」の神話があったというグノーシス研究の中心的理論が崩壊した」（44）

「「グノーシス」は元来キリスト教以前の運動であったが」「キリスト者であることを要求する人びとによって形成されたもの」（基本的に異端）／「最初からキリスト教外の、非キリスト教的な運動であって、たまたま一定期間キリスト教に順応したもの」（基本的に異教。ユダヤ教起源のグノーシス・ユダヤ教グノーシスを含む）

「一つの宗教」／「古代の哲学の基準へと方向づけられた、ユダヤ・キリスト教的宗教をいっそうよく理解しようとする試み」

「「グノーシス」とは明らかに古代の教養都市の中でキリスト教を時代の水準において説明しようとする相当教養ある人びとの試みから成立した。そのさい、ユダヤ・ヘレニズム

的思想家が受容していたものを同時代の通俗哲学から彼らは引き継いだ。」(112)

初期形態／大規模な体系化（二世紀後半と三世紀前半）／頂点にして終点（マニ教）
バシリデス　ヴァレンティノス（二世紀半ば）とヴァレンティノス派
プトレマイオス
ヘラクレオン
バルベロ・グローシス派
マルキオン

５．展開・広がり（大貫隆(1999)によるまとめ、堕落神話について）
・「人間の真の自己の隠喩としての「光」、その対立原理としての「闇」をそもそも初めから設定し、互いに対立させると同時に、二つの原理が混合し合う事件を考える型」→「イラン・マニ教型」「東方型」
・「「光」そのものの中に一つの「破れ」が発生し、それが原因になって、やがて「闇」の領域に造物神が生成し、さらには彼によって目に見える宇宙万物が創造され、その中に人間が「心魂」と肉体から成るものとして創造された」→「シリア・エジプト型」「西方型」(18)
６．普遍的な精神類型としてのグノーシス
・「グノーシス主義は古代末期から近代に至るまで、地中海およびヨーロッパ文化の実にさまざまな領域、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教という歴史的世界宗教、神学、哲学、神秘主義思想、科学史などの領域において、表の文化に対する裏の文化として見え隠れしながら、連綿と影響を及ぼし続けた」「西欧における啓蒙主義と合理主義の成立も「グノーシス主義の痕跡」を最終的に越えようとする試みであったという見方」「近現代の世界文学、深層心理学、現代哲学、表象文化、ジェンダー論、世界規模の新霊性運動」(大貫、1999、305)
・ユング派の深層心理学→「悪」の問題をめぐって、グノーシス主義に注目（湯浅、宮下)。
７．概念規定に関連して（用語の混乱に対して、合意形成の試み）
・「1966 年 4 月、イタリアのメッシーナ大学において、「グノーシス主義の起源に関する国際コロキウム」」「「グノーシス主義の定義によせて」と題する報告」(荒井、1971、337)
「われわれは、グノーシス主義におけるこのような原理的側面を、歴史現象としての「グノーシス主義(Gnosticism)と区別して、「原グノーシス主義」(Proto-Gnosticism)と呼ぶことに意見が一致した」」(346)
「グノーシス主義はそれに固有な Daseinshaltung に基づく創作神話を伴うが、その本質は次のような三つのモチーフによって形成されている。(1)究極的存在と人間の本来的自己は本質において一つであるという救済の認識、(2)その前提としての反宇宙的二元論、(3)その結果として要請される、「自己」の啓示者あるいは救済者」(350)
・マルクシースの「グノーシス」類型論的モデル（34-35）
「以下でわれわれは「グノーシス」を次のような運動のことと理解する」(34)
1.彼岸の遠い至高の神。
2.神的諸像の導入、遠い至高の神よりも人間に近い諸像への分裂。
3.世界と物質についての悪しき被造物としての評価。
4.自らの創造神あるいは守護神の導入。デミウルゴス。
5.神的要素がある階級の人間内部で神的火花として眠っているが、そこから解放されるという神話的ドラマ。
6.上位の領域から降り、そして昇る彼岸の救済者像を通してのみ獲得できる認識（グノーシス)。
7.神は人間の中にあるという人間の認識を通した救済。
8.神概念や精神と物質との対立、人間論において表現される、さまざまに形成された二元論。

↓
堕落神話＋救済神話

（２）古代キリスト教とグノーシス主義

８．資料について（マルクシース、47-90）

・オリジナルなテキストを伝えるグノーシス批判の教父
　エイレナイオス（二世紀末）、アレクサンドリアのクレメンス（215 年までに没）、ヒッポリトス（二世紀後半から三世紀前半）、オリゲネス（三世紀中頃より以前）、エピファニウス（四世紀後半）

・異端報告を行っているグノーシス批判の教父
　ユスティノス（二世紀中頃）、テルトゥリアヌス（160-220）、シリアのエフライム（306-373）、アウグスティヌス（354-430）

・グノーシスのオリジナル資料：特に、ナグ・ハマディ写本（その一部がユング写本、コプト語）、トゥルファン出土のマニ教文書など。

・非グノーシス資料：ヘルメス文書、ヘーハーロート文学

９．ナグ・ハマディ文書発見の意義
　1945/46 年に、上エジプトのハムラ・ドム付近の洞窟の一つから陶器の瓶に入ったパピルス群（５２文書を収めた１３写本）を発見。最も近い集落がナグ・ハマディ。
　多様な文学類型：「トマス福音書」「フィリポ福音書」（語録福音書、Ｑ）、「真理の福音」、「ヤコブのアポクリフォン」、「ペトロと１２使徒の行伝」、「パウロの黙示録」など。

10．正統キリスト教との競合・最大のライバル、キリスト教との共通性

・パレスチナからヘレニズム大都市へ
　「ローマ、アレクサンドリア、アンティオキアといった古代の大都市」
　Stark（2006）によれば、Rome（450,000）、Alexandria（250,000）、Antioch（100,000）

・「二世紀後半から三世紀前半にかけて、キリスト教はその授業を専門化させ、ちょうど通俗哲学の水準を上回る哲学の領域で一般的であったように、秩序だった授業計画と生徒と教師の共通した授業をもった安定した学校を形成するように努力していた」（146）、「「認識者」の小さな集団としてカリスマをもった自由な教師のまわりにあつまった。・・・この人びとはキリスト教神学が総体的に二世紀に立っていた水準にあって、三世紀の本質的な専門化傾向をともにすることはなかった。」（147）

・「宗教市場において教養高い同時代人にキリスト教とその特有の世界観の便益を理解できるものとし、こうしてキリスト教を競争力のあるものとしようとする試み」「習得可能な範囲で聖書文献学や哲学的議論のような同時代の学問的方法をもちいて、時代の宗教的な大問題に向けてキリスト教的な解答を与える努力」「多くの教養人の意見に従って欠落していると考えられる部分について聖書物語を完成させる神話を語ろうとする試み」（155）
　「二世紀という時代はある種の実験室」「帝国の多様な片隅において才能豊かな諸個人によって、どのようにすれば古代の世界観市場に競争力のあるキリスト教神学に到達できるかについて、いわば実験が行われたのであった。われわれがここで「グノーシス」に数えてきた者だけでなく、多くの神学者が通俗的プラトン主義思想を使って実験をした。」（156）
　・都市的環境、弁証的意図とその手段（通俗哲学と神話形成）
　・キリスト教会が正統教会に収斂するプロセス＝グノーシスが異端として排除されるプロセス（論争的意図）
　↓

12．反グノーシス主義の教父
　論争の中の教理形成

13．争点、神話と歴史

・歴史的実在としてのイエスの意義と歴史的事実としての十字架・復活

キリスト仮現論、そしてグノーシスの多様な神話体系において、歴史的イエスの人格はもはや場を持たなくなる。

・創造の善性、神の唯一性（二元論に対する一元論）

（３）現代的課題としてのブノーシス

14. ユング心理学とグノーシス研究、そしてその意義
15. 現代の異教としてのグノーシス・タイプの新宗教

＜参考文献＞


１．Ｃ．マルクシース『グノーシス』教文館。
２．筒井賢治『グノーシス――古代キリスト教の＜異端思想＞』講談社選書メチエ。
３．大貫隆訳・著『グノーシス神話』岩波書店。
４．大貫隆『グノーシスと「妬み」の政治学』岩波書店。
５．荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』『新約聖書とグノーシス主義』岩波書店。
６．湯浅泰雄『ユングとキリスト教』『ユングとヨーロッパ精神』人文書院。
７．荒井献・大貫隆編『ナグ・ハマディ文書Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』岩波書店。
８．柴田有『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房。
９．ハンス・ヨナス『グノーシスの宗教――異邦の神の福音とキリスト教の端緒』人文書院。
10. Rodney Stark, *Cities of God. The real Story of How Christianity Became an Urban Movement and Conquered Rome*, HaperOne, 2006.
11. 櫻井義秀・中西尋子『統一教会――日本戦教の戦略と韓日祝福』北海道大学出版会、2010 年。